

平成27年度病院医学教育研究助成成果報告書

報告年月日：平成28年 4月 5日

研究・研修課題名	3学会合同呼吸療法認定士資格取得のための研修補助
研究・研修組織名（所属）	リハビリテーション部
研究・研修責任者名（所属）	石田修平（リハビリテーション部）
共同研究・研修者名（所属）	

目的及び方法、成果の内容

①目 的

本院リハビリテーション部門における対象疾患として、呼吸器・循環器など内部障害を有する患者が増加している。近年ではさらに、周術期管理チームをはじめとした手術前呼吸療法の介入や集中治療分野からの介入など、周術期から開始する症例も増加しており、診療報酬上でも評価されている。呼吸理学療法の有用性については、入院回数と入院日数の減少や術後合併症の予防など多くの RCT によりエビデンス（Grade B）が認められている。本院においても手術前後から呼吸機能に対して呼吸療法認定士が関わることで合併症を減少させ、在院日数の短縮に寄与できると考える。

理学療法士が周術期での積極的な介入を進めていくなかで、医療の質を高め、より効果的な介入をしていくためにも、呼吸療法士の資格を取得していくことは必須と考える。

本研修においては、日本胸部外科学会、日本呼吸器学会、日本麻酔科学会の3学会が創設した、3学会合同呼吸療法認定士の資格取得を目的とする。

②方 法

理学療法士1名が、2015年8月に行われる、3学会合同呼吸療法認定講習会を受講する。講習会に参加し認定試験受験資格を取得の後、11月に開催される認定試験を受験し、合格することにより資格を取得する。以下に資格取得までの概略を示す。

～3学会合同呼吸療法認定士の取得要件～

- 理学療法士として2年以上の経験があること
- 受講申し込みの申請時から過去5年以内に12.5点以上の点数を取得すること
(平成23年度研修助成費にて、日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会の参加で取得済み)
- 2日間の講習を受講すること
以下に、講義内容を示す。
I.血液ガスの解釈 II.呼吸不全の病態と管理 III.酸素療法
IV.人工呼吸器の基本構造と保守および医療ガス V.気道確保と人工呼吸
VI.呼吸リハビリテーション VII.人工呼吸中のモニタ VIII.呼吸不全における全身管理
IX.開胸・開腹手術後の肺合併症 X.新生児の呼吸管理 XI.NPPVとその管理法
XII.呼吸機能とその検査法
- 認定試験に合格すること

③成 果

(成果)

8月31日、9月1日に東京品川プリンスホテルで開催された講習に参加

11月29日、帝京平成大学中野キャンパスで開催された認定試験に参加

12月下旬、郵送にて結果報告（合格し資格取得）

3月中旬、認定書が送付

(成果詳細)

東京品川プリンスホテルでの2日間の講習（8月31日、9月1日）において、呼吸療法の基礎となる分野について学習した。呼吸リハビリテーションに関する分野は基礎的な部分も多かった。COPD患者に対してのリハビリテーションや術後管理の点など、臨床的に効果が期待でき、エビデンスレベルも高い話であった。本院リハビリテーション部門においても実践できている部分でもあり、医療の質という面で担保できているのではないかと考えられた。呼吸リハビリテーションの分野はもちろん勉強になったが、人工呼吸器の基本構造や呼吸不全における全身管理法、開胸・開腹手術後の肺合併症など本院で必ず必要となる知識を得ることができ、大変有意義であった。ICUで働くうえでは人工呼吸器に対する知識は必須だと感じており、講習にて基礎から実際のモードまで勉強できたことは非常に良かった。また、医療が進歩することで重症患者に対する呼吸療法が求められるようになっていくことも知り、理学療法士としても知識をより良く更新していかなければならないと感じた。講習会を通して、様々な病態での呼吸状態の変化を知ることによって、排痰肢位の決定や、離床促進の判断、安静の必要性など、臨床に活かすことができ、知識の補填というだけの意味でも質の高い医療に貢献できると思われた。

11月29日の筆記試験では、マークシートによる選択式で試験が実施された。呼吸療法テキストや講習会の全範囲にわたって出題されていた。筆記試験は合格できた。全国での合格率は63.6%であった。

3学会合同呼吸療法認定士の試験に合格できたことに満足せず、より研鑽を積み、医療の質の向上に向けて努力していきたい。

* 3学会合同呼吸療法認定士認定委員会

3学会合同呼吸療法認定士 認定証 受領済 【2016年1月1日】